

明石という筋

—『源氏物語』における帰属意識—

吉村 悠子

一、はじめに

『源氏物語』には「明石一族」と通称される人々が登場する。「明石一族」についての研究は、「明石の君の物語」を分析し『源氏物語』の構造を明らかにした阿部秋生氏の「明石の君の物語の構造」^(注1)や、明石の君を光源氏との階層的落差により常に「身のほど」を意識させられた卑下と忍従の努力をする女性と説いた今井源衛氏の「明石の上について」^(注2)、説話や物語との関係を論じながら「明石の上」を作者の分身、実質上の女主人公として評価する石川徹氏の「明石の上」^(注3)を先駆として、多岐にわたる人物論や巻論がある^(注4)。

明石入道、明石尼君、明石の君、明石中宮^(注5)の四人は先行研究において主に「明石一族」として論じられてきた。対象とする時点、対象とする人物達に拠り「家」「一門」「一族」などの類似した概念の中から適切なものを採すことになり、それ故に入道、尼君、明石の君の三者を論

じる場合、或いはその三者のみが存在した一時点について検討する場合には「家」を選択することも適切であった。それに対して、前三者に姫君を加えて論じる時には、或いは明石在住時から彼らの栄華が語られるまでの長期間を論じる場合には、「家」の範疇におさまらないため^(注6)に今まで「一族」という概念が選^(注7)び取られてきた。

しかし、『源氏物語』の本文中において「明石一族」が「一族」(ひとそう) 或いは「族」(そう) と称されることはない。そこで、彼らが何故本文中で「一族」や「族」と称されることがないのか、そして何故「筋」と称されるのかについて、彼らの本質や在り方を含め考察する。その上で彼らの物語における意義、その存在が照射することについて論じる。

二、「一族」「族」と「筋」

まず、『源氏物語』の「一族」について検討する。

a 兵部卿官は、いとあてになまめいたまへれど、にはひやかになどもあらぬを、いかでかの「一族」におぼえたまふらむ、ひとつ后腹なればにや、など思す。

(若紫①二二七頁)

b 今はいとど「一族」のみ、かへすがへす栄えたまふこと限りなし。世のおもしろものしたまへる大臣の、かく世をのがれたまへば、一中略―三位中将なども、世を思ひ沈めるさまこよなし。かの四の君をも、なほ離れ離れにうち通ひつつ、めざましうもてなされたれば、心とけたる御婿の中にも入れたまはず。思ひ知れとにや、このたびの司召にも漏れぬれど、いとしも思ひ入れず。

(賢木②一三八―九頁)^(注)

a は、兵部卿官は藤壺とは違う美貌をもつのに、どうして紫の上は兵部卿官の「一族」である藤壺に似ているのか、兵部卿官が藤壺と同じ后腹だからか、と光源氏が想像した場面である。この「一族」は「ひとつ后腹」という限定があるため、同腹の兄妹のみが含まれる「一族」となり、具体的には藤壺が想定される。^(注) b は職を辞した左大臣に対して栄えている「一族」であるため、右大臣の「一族」となる。また、この場面では頭中将が右大臣の四の君の婿であるのに昇進しないことが述べられている。「婿」は親しさの程度によって「一族」の「栄え」

の余慶を受けるか否かが決められていた。つまり、「婿」は娘の配偶者という理由で恩恵を受けることもあるが、基本的には「一族」の範疇ではないということである。

『源氏物語』における「一族」は二例しかないため、「族」の用例も併せて考察する。

c 大夫監とて、肥後国に族ひろくて、かしこにつけてはおぼえあり、勢ひいかめしき兵ありけり。

(玉鬘③九三頁)

d これは、源氏の御族にも離れたまへりし後大殿わたりにありける悪御達の落ちとまり残れるが問はず語りしおきたるは、

(竹河⑤五九頁)

e 「これは澄みのほりて、ことごとしき気のそひたるは、致仕の大臣の御族の笛の音にこそ似たなれ」など独りごちおはす。

(権本⑤一七一頁)

c は大夫監についての説明であり、肥後国における影響力の大きさ等が述べられている。「族」が「ひろく」とあり勢力の強さを述べることから、この「族」は夫婦とその子どもだけではなく大勢の人間が含まれることになる。d は竹河巻の冒頭において、鬚黒周辺の女房達による語りだということが述べられた場面である。「源氏の御族にも離れたまへりし後大殿」という表現からわかるように、玉鬘の夫である鬚黒は「源氏の御族」には含

まれない。bと同様に、娘の夫は「族」の範疇外なのである。eは、対岸から聞こえてきた笛の音が頭中將の「族」の音に似ていると八の宮が思う場面であり、それゆえに奏者が明らかでなくても笛の音は薫のものだと判断される。そのため薫も「致仕の大臣の御族」に含まれる可能性があるが、その場合この「族」は頭中將を基点とする孫世代の人間まで含む「族」になる。

fこのなやましきこともいかならんとすらむ、いみじく命短き族なれば、かやうならんついでにもや、はかなくなりなむとすらん、
(宿木⑤四一三頁)

g「かく宇治の宮の族の命短かりけることをこそ、いみじう悲しと思ひてのたまひしか」
(蜻蛉⑥二五八頁)

fは中の君の心内であり、既に親姉妹が亡くなっている短命の「族」だから、自分もこの出産で死亡してしまうのではないかと思ひ悩む場面である。「いみじく命短き」という言葉で想起されるのは母北の方や姉の大君であるが、既に没した長命ではない人物と考えれば父の八の宮も該当する。つまり、この「族」は八の宮、北の方、大君、中の君が含まれる「族」となる。gは明石中宮の発言であり、薫が宇治の女君たちの短命を嘆いていたことを述べている。薫が嘆く対象として具体的には大君、

浮舟が想定されるが、「宇治の宮の族」と、八の宮を中心とする「族」として語られており、事実二人とも八の宮の「族」に包括される存在であった。

『源氏物語』における「族」は「源氏の御族」「致仕の大臣の御族」「宇治の宮の族」のように主体となる人物を示すことが多く、具体的に示さない場合でもfのように「族」の構成を想定しやすいものである。また、「族」は幾世代に及ぶ人々を表すというよりは、その人物に係する同時代の縁者を表すものである。「族」に含まれる人数が多いことを言う場合にも、その時点で把握される人々の数が多いことを表していた。cも、三十歳前後である大夫監の子孫が多いことを述べているわけではない、親兄弟、伯父や従兄弟を含むかもしれないが、縁者が多く勢力があるという説明である。

また、『源氏物語』の「族」は、娘の夫が範疇に含まれないことや、用例の多くが主体となる人物とその妻子或いは兄弟を含む集団であるなど、「家」とよく似た構成のものでもあった。ここで注意したいのは、『源氏物語』における「一族」^(注1)「族」の用例の中に娘の子どもまで範疇に含むと断定できる例がないことである。eでは、薫という孫世代の人間も「族」に含まれる可能性があったが、薫は息子の子どもであり娘の子どもではない。「家」

の範疇に娘の子どもが含まれないのと同様に、「族」の範疇にも娘の子どもは含まれない。つまり、入道、尼君、明石の君に、姫君を加えた四人を扱う場合には、娘の子どもにあたる姫君が含まれるため、彼らは『源氏物語』における「一族」「族」には該当しないのである。

次に、「明石一族」やその通称に影響を与えたとされる『うつほ物語』の俊蔭一族について検討し、その上で「明石一族」について考察する。

⑦子の手母にもまさり、母は父の手にもまさりて、もこの次々は劣りこそすれ、この族は伝はるごとにまさること限りなし。
(俊蔭①八一―二頁)

⑧「風情はなほこの朝臣のはまさりけり。あやしく、この族の父まさりなるかな」
(蔵開中②四六四頁)

⑨は、俊蔭一族の琴の伝承に関して子孫の方が上手だということが語られた場面である。物語の始発の段階から俊蔭一族は本文中でも「族」として規定されている。⑩は朱雀帝が詩集を読み、俊蔭の父の集の方が優ると評価した場面であり、帝といういわば公の存在からも俊蔭一族は「族」として把握されるのである。

俊蔭一族に使われる「族」には、琴以外に関する例や俊蔭の親又は清原松方まで含まれる可能性がある例もあるが、基本的には俊蔭、俊蔭娘、仲忠という血縁を中心

とした集団である。仲忠がいぬ宮に秘琴伝授することを「一生の大きな大事」(楼の上③四四九頁)と俊蔭娘に述べたように、秘琴伝授が俊蔭一族に必要不可欠なものであった。それに対して兼雅や女一の宮は共に秘琴伝授から疎外されており、俊蔭娘や仲忠の配偶者であっても彼らは「族」の範疇に含まれていない。俊蔭が「琴弾きて族立つべき人」(俊蔭①三〇頁)と語られたように、俊蔭一族は琴を伝授する血縁者によって成り立つ「族」なのである。

⑪仲忠、「一つ族の手は、松方を放ちて仕うまつる人侍らず」。一中略「仲忠、「移し取りて伝へはべりし仲忠だに、絶えてその筋覚えずはべるを、まして元の師は、覚ゆること難くやはんべらむ」。
(内侍のかみ②三三〇―一頁)

⑫は朱雀院に対する仲忠の返答であるが、仲忠は発言の中で「族」と「筋」を使い分けており、「筋」は流儀・芸風として用い、自らが属する集団を「族」と称している。つまり、仲忠には自分達が「族」という自覚があった。俊蔭一族の成員は物語の中で「族」として定義され、登場人物自身も「族」という自覚を持つものとして描かれていたのである。

『うつほ物語』の本文中で「族」と定義されている「俊

「蔭一族」に対し、「明石一族」は本文中で「一族」「族」と称されることがなく、『源氏物語』における「一族」「族」にも該当しない。俊蔭一族からの影響があつたとしても、「明石一族」と俊蔭一族では相違点が多いのも確かであり、^(注1) それぞれの物語における定義の差は軽視すべきものではない。入道、尼君、明石の君、姫君の四人は『源氏物語』における「一族」や「族」とは異なる存在であるために、本文中においてその呼称を用いられなかったのである。

それでは、『源氏物語』の中で入道、尼君、明石の君、姫君の四人は一体どのような存在として描かれているのだろうか。

まず、入道は親が大臣という誇りを持ち、自身の零落を嘆くなど父大臣の「家」に関する意識があるが、それは入道個人に限定されたことである。娘の明石の君には名門の末という意識はなく、痛感するのはその低い「身のほど」である。元来、子どもが明石の君のみという時点で「家」が存続不可能なことは明白である。名門出身の意識を持ち、零落したことを嘆き、子孫が更に落ちぶれる可能性を憂えるが、入道は父大臣の「家」の継承を望むわけではない。入道が伝えることを望んだのは「家」ではない別のものであり、それは次の光源氏の発言から

も確かめられる。

「かの先祖の大臣は、いと賢くありがたき心ざしを尽くして朝廷に仕うまつりたまひけるほどに、もの違ひ目ありて、その報いにかく末はなきなりなど人言ふめりしを、女子の方につけたれど、かくていと嗣なしといふべきにはあらぬも、そこらの行ひの験にこそはあらめ」
(若菜上④一二八頁)

この世人が言つた「先祖の大臣」に「末」がないということは跡継ぎがないということであり、父大臣の「家」が絶えることを表している。また、「嗣なしといふべきにはあらぬ」という光源氏の曖昧な言葉が示すように、「家」のような明確な形を持つ集団として「嗣」があるわけでもない。それでも入道の「行ひの験」により「女子の方」だけと続いているものがある。その入道の「験」により「女子の方」に何らかの形で残るもの、つながるものが「筋」^(注2)なのである。

「筋」は「氏」や「家」「族」のような集団意識とは違い、つながりや連なる様を表すものである。現在の言葉で言うならば血統や血脉に近いが、それを物語の中では「筋」と表現する。

母君をば、もとより、かくすこしおぼえ下れる筋と知りながら、生まれたまひけむほどなどをば、さる

世離れたる境にてなども知りたまはざりけり。

(若菜上④一〇五頁)

これは、尼君の昔語りを聞いた際の女御の心中であり、母方を「すこしおぼえ下れる筋」として把握している。女御は自身につながるこの「筋」の存在自体は知っていたが、尼君から入道の存在や明石の浦における自身の出生の事情を聞くことで、改めてそこに属する自分というものを強く意識したのである。

前述した光源氏の発言や女御の心中から、彼らが「筋」として把握されていたことが窺えるのであり、入道、尼君、明石の君、姫君の四人を本論では明石の筋として論じる。

三、明石の筋

入道、尼君、明石の君、姫君の四人は物語の中で「筋」として語られていた。では、何故彼らは「筋」とされたのか。それは、彼らの本質が集団ではなく、「筋」というつながりだからである。彼らは目的を共有し集団を形成しているわけではなく、個々の意志や行動が連動し影響し合い、その結果集団と見做されるほど強い結びつきを有しているのである。以下、明石の筋の実態について詳しく検証する。

まず、明石の筋とその繁栄は入道の意志や伝えに拠るところが大きい。入道は、「わがおもと生まれたまはむとせしその年の二月のその夜の夢」(若菜上④一一三頁)を信じて、「心ひとつに多くの願を立て」(若菜上④一一四頁)ていた。夢告の実現の為に明石の君を「都の貴き人に奉らん」(明石②二四五頁)という高い志を持って住吉詣をさせており、万が一それが叶わない場合には「浪の中にもまじり失せぬ」(明石②二四六頁)と遺言を残した。入道は「筋」を次代に残すこと、それを高貴な血へとつなげていくこと、明石の「筋」として繁栄することを望み、夢告の実現に向けて努力したのである。

栄華の為に尽力してはいるが、入道自身は栄華に立ち会うことも恩恵を受けることも望まない。明石の君たちの上京を境に表面的にはほとんど姿を消してしまふ。初めのうちは「おほつかかならず人は通はし」(薄雲②四四二頁)て明石の君たちの様子を伝え聞いていたが、後には「京に、ことなることならで、人も通はしたてまつらざりつ」(若菜上④一一二頁)と語られ、入道も手紙の中で「させることなきかぎりは聞こえうけたまはらず」(若菜上④一一三頁)と述べるように交流も控えていた。既に松風巻の離別時にはこれが永別のつもりであることを告げており、女御の皇子出産を聞き、夢告

の実現と栄華を確信した入道は明石の君に最後の手紙を送り、奥山に入り完全に姿を消す。その時に入道は自分の命日を知る必要も喪に服す必要もないことを伝えてゐる。「今さら^④にこの世の栄えを思ふにもはべらず」(若菜上④一一三頁)と述べたとおり、入道は今生での栄華を受けずに姿を消すのである。

この時に、入道は自身の姿を消すだけでなく、邸宅をはじめとした財産の大半を寺に納めてしまう。琴の琴や琵琶などの楽器まで含めて価値のあるものは寺に寄進し、弟子に配り、最後に残ったものを尼君たちに送っている。形あるものとして入道につながるもの、由緒のあるものは極力遺そうとしなかつたのである。

その代わりに、入道は一生をかけた夢やそれを象徴する願文、琴の相伝を伝えている。入道は入山の直前に明石の君に最後の手紙と共に「かの社に立て集めたる願文ども」(若菜上④一一六頁)を送っている。手紙や願文は入道から尼君の手を通して明石の君に伝えられ、また明石の君から女御へと託された。手紙や願文を通して、入道の夢や願いが尼君、明石の君、女御へと伝えられ、思いが共有されてその支えとなった。入道自身は姿を消してしまつたが、その夢や願いは確かに受け継がれていくのである。

また、入道は彼らにとって重要なもの、支えとなるものとして楽も伝えている。次の例は入道と光源氏が箏の琴の相伝について交わした会話である。

嵯峨の御伝へにて、女五の宮さる世の中の上手にも
のしたまひけるを、その御筋にて、とりたてて伝ふる人なし。
(明石②二四二頁)

延喜の帝の相伝は入道や明石の君が伝えているが、嵯峨の女五の宮へと伝わった「筋」はその先に伝える人がいないということが語られた場面である。嵯峨の「御筋」は絶えたが、延喜の帝からの「筋」は続いている、明石の「筋」として伝えているということである。この延喜の帝からの「筋」は、入道の演奏が「今の世に聞こえぬ筋」弾きつけて、手づかひいといたう唐めき、揺の音深う澄ましたり」(明石②二四三頁)と描かれた箏の「筋」だと想定される。そして、六条院の女樂における女御の箏の演奏が「母君の御けは、ひ加はりて、揺の音深く、いみじく澄みて」(若菜下④二〇一頁)と入道とは同じ演奏描写をされていた。この演奏描写は『源氏物語』の中で入道と女御のみに使われるものであり、箏の「筋」は確かに女御に伝えられているのである。また、この女御の演奏は「母君の御けはひ加はりて」と語られており、明石の君を通しての伝えであったことも明

らかである。箏の琴の「筋」は入道から明石の君へ、明石の君から女御へと伝えられたのである。明石の筋は血縁を表す「筋」だけではなく、楽の「筋」や夢や願によってもつながっているのである。

入道は「家」の再興ではなく、「筋」を次代につなぎ、明石の「筋」として繁栄することを望み努力していた。邸宅や財産など入道につながる形あるものを極力なくし、自身も奥山に入り姿を消すことで表面的なつながりを断った。その代わりに夢、願、楽などの形のない大切なものを伝えていた。入道の意志、その夢や願が明石の「筋」の根底を支えるなど、入道が果たす役割は非常に重要だったのである。

次に、尼君から明石の君、姫君へというつながりを考察する。尼君は当初から入道と夢や目的を共有していたわけではなく、反対意見を言いつつも我の強い入道に従う存在だった。しかし、上京を境に、入道の代わりに尼君が前面に出ることになる。上京時に滞在する邸として選ばれた大堰邸は「昔、母君の御祖父、中務宮と聞こえけるが領じたまひける所」（松風②三九八頁）と紹介される尼君に関係する邸であった。大堰邸を訪問した光源氏は尼君の「けはひ」に中務宮の孫という出自を思い出し、「昔物語に、親王の住みたまひけるありさまなど」（松

風②四一三頁）を尼君に語らせている。そして、その様子が光源氏に「みやびかによし」と捉えられるなど、大堰邸への転居に際して、尼君の本来の出自が高貴であること、それ故の美質を持つことが繰り返し描かれていた。明石の筋が本来は血筋も良いことを示すために、尼君の持つ高貴さが強調されたのである。

また、尼君は上京してから節目ごとに重要な役割を果たしている。明石の君が姫君を紫の上に譲ることを迷った時には、情を抑え姫君の将来に有利となるよう、ひいては明石の筋の将来にも有利となるように適切な助言を与えていた。出産を控えた女御には、「生まれたまひしほどのこと、大殿の君のかの浦におはしましたりしありさま」（若菜上④一〇四頁）などの明石の浦における女御の出生時の事情を告げている。尼君の昔語りによって女御は詳しい事情を知り、自分を明石の筋として認識し直してそれまでの自分の言動を反省していた。尼君の昔語りを契機として、尼君、明石の君、女御が入道のことを思い、歌を詠み感慨を共有することで四人の絆が深まっているのである。

また、明石の君と尼君が住む「明石の御町」（若菜上④一〇三頁）が女御の出産場所として選ばれたことは、女御の母方とのつながりの強さを表している。栄華をも

たらず存在である若宮が「明石の御町」で生まれるという、明石の筋にとつて非常に意義深いことでもあった。この町だからこそ尼君も若宮の誕生を見届けられたのである。

尼君は若宮の立坊まで見届けており、その願果たしである住吉参詣にも同行している。長生きしてこの榮華に立ち会えたことを喜び、住吉参詣時に「世の言種にて、「明石の尼君」とぞ、幸ひ人に言ひける」(若菜上④一七六頁)と幸運が語られていた。この住吉参詣が入道の願に依るものであることは秘められたが、女御、明石の君、尼君と三人が揃って住吉に参詣している。明石の筋は住吉の神への信仰を持ち、その恩恵を受けるという点においてもつながっていたのである。

また、尼君が榮華に立ち会うことは、尼君への手紙に「そこにはなほ思ひしやうなる御世を待ち出でたまへ」(若菜上④一一六頁)と書かれたように、入道の望みでもあった。はじめは別の考えや思いを持っていたが、次に二人の思いは近づき、入道の最後の手紙や願文が尼君を通して伝えられることで尼君も入道の夢や願いを共有したのである。二つの糸が縊り合わされて一つとなるように、二人の思いが集約されて入道と尼君で一つのつながりを成すのである。

そして、明石の君は入道と尼君の筋を受け継ぎ、姫君にそれらを伝えることになる。また、その他にも様々な影響を姫君に与えている。明石の君が姫君の入内に際して後見となつてからは、姫君を「思ふさまにかしづきこえ」ており、その様子が「いかめしう、並びなきことは、さらにもいはず、心にくくよしある御けはひを、はかなきことにつけても、あらまほしうもてなしきこえたまへれば」(藤裏葉③四五二頁)と語られていた。姫君はそれまでは容姿の美しさや可愛らしさを中心に描かれており、教養の深さや奥ゆかしさなど内面の深みに触れられることはなかった。しかしこの場面では、「心にくし」「よしあり」など明石の君に特徴的な表現が姫君やその周辺の描写に使われている。明石の君に後見され付き添われることにより、姫君は多大な影響を受けて変化したのである。

その後も、明石の君が常に女御に付き添い行動を共にしていることが繰り返して語られている。紫の上の薬師仏供養と精進落しの祝宴においては、「挿頭の台は沈の華足、黄金の鳥、銀の枝にゐたる心ばへなど、淑景舎の御あづかりにて、明石の御方のせさせたまへる」(若菜上④九四頁)と女御担当を明石の君が指示して作らせたことが語られるなど、後見として様々な領域まで明石の

君が女御の周囲を取り仕切っていたことが窺える。また、若宮出産後に東宮が女御の帰参を促した時には、東宮の心に添う紫の上や光源氏の言動に対し、女御の体を思いやる明石の君の親身な対応が描かれるなど、描写の端々に明石の君母子の心の紐帯が看取される。六条院の女楽における花の喩では、女御は「同じやうなる御なまめき姿のいまずこしにはひ加はりて、もてなしけはひ心にくく、よしあるさましたまひ」（若菜下④一九二頁）と描写され、明石の君は「もてなしなど気色ばみ恥づかしく、心の底ゆかしきさまして、そこはかとなくあてになまめかしく見ゆ」「けはひ、思ひなしも心にくく侮らはしからず」（若菜下④一九三頁）と描写されるなど、母子の人物描写に共通する表現が増えていた。「もてなし、けはひ」の両方に言及されるのはこの母子だけであり、女三の宮や紫の上にはないものである。女楽では、女御が明石の君を通して入道からの箏の琴の筋を受け継いでいることも描かれるなど、明石の君から女御への多大な影響が見て取れるのである。

また、明石の君は、若宮誕生の折に「まことの祖母君」（若菜上④一〇九頁）であるにも関わらず迎湯の役を務めるなど、卑下した態度を貫きつつも宮達の誕生や儀式に携わり、女御やその子ども達との関係を作っていた。

入道、尼君からの筋を受け継ぎ、女御へと伝えるだけではなく、独自の努力と忍耐を重ねることで周囲から高く評価され、常に傍に在ることで更なる影響を女御に与えていたのである。最後の登場場面では「二条院とて造り磨き、六条院の春の殿とて世にののしりし玉の台も、ただ一人の末のためなりけりと見えて、明石の御方は、あまたの宮たちの御後見をしつつ、あつかひきこえたまへり」（匂兵部卿⑤二〇頁）と女御や宮達の後見をする様子が語られるなど、明石の君の人生の結実としてその幸福が語られており、明石の筋の繁栄やそれが後代に続いていく様子が読み取れるのである。

入道、尼君、明石の君、女御から成る明石の筋は集団ではなくつながりであった。入道からのつながり、尼君からのつながり、それが同化してみえるほど強く結びつき、明石の君へと伝えられ、またそれを明石の君が女御へと伝えていた。幾つもの細かい糸が依り合わされて強固な糸になるように、幾つものつながりが依り合わされて明石の筋を形成していたのである。

明石の筋は、楽の音は伝えても楽器は伝えない、夢は伝えても財産は伝えないことに象徴されるように、形は伝えなくても、内実を、大切な部分を伝えていく。そして、入道と尼君から明石の君に、明石の君から姫君へと

受け継ぎ伝えていくことそのものが明石の筋を形作り、その存在感を強めていた。「家」でも「族」でもなく「筋」としか表現し得ない存在であるために、彼らは「筋」と称された。彼らが「筋」というつながりによって成り立っていたからこそ『源氏物語』において「筋」として描かれたのである。

四、終わりに――明石の筋の照射するもの

明石の筋はそれ以外に表現し得ない存在であるために「筋」と称されたが、一方でその明石の筋は光源氏(光源氏)を対照化する。光源氏は膝下で細心の注意を払って女御を育てており、物語や薫香や書などを含め周囲のものには財を尽くし人脈を駆使して最高のものを揃えていた。光源氏の主たる居住部分である二条院や六条院の大部分を受け継いだのも、女御やその子どもであった。女御には「六条の女御」(若菜下④一六五頁)という光源氏の「家」の一員であることを象徴するような呼称もある。しかし、女御は明石の筋に属することの方を強調して描かれており、光源氏の「嗣」とは言えない。光源氏と明石の筋を対照させることにより、光源氏が女御に何を伝え、何を伝えなかったのかも明らかになる。

女御の君にも、対の上にも、琴は習はしたてまつり

たまはざりければ、――中略――にて我に伝へたまはざりけむとつらく思ひきこえたまふ。

(若菜下④一八二頁)

この例では光源氏が女御きんに琴の琴を教えなかったこと、女御がそれを恨めしく思うことが描かれている。女楽の場面に「いづれもみな棄てがたき御弟子どもなれば」(若菜下④一八七―八頁)とあるように、光源氏は女御を弟子の一人とは思っている。しかし、光源氏が最も好み、得意とし、その腕前を滅多なことでは披露しないほど大切にしていた琴の琴は伝えなかつた。その代わりに、女御は明石の筋として箏の琴を受け継ぐことが描かれており、明石の楽を受け継ぐことの方が重視されていた。光源氏自身も「後々は師とすべき人もなくてはなむ、好み習ひしかど、なほ上がりての人には、当たるべくもあらじをや。まして、この後といひては、伝はるべき末もなき」(若菜下④一九九頁)と述べており、琴の琴を伝えるものがいないことを嘆いている。また、琴の琴に関して光源氏きんに師も嗣もないことは、光源氏の卓越的な在り方を、棹の中に納まりきれない光源氏の超越的な在り方を表している。それと同時に、伝えたいけれど伝えられる相手がいない、若しくは伝えたい相手がいるけれど伝えられないという光源氏の嘆きをも表すのである。

六条院は、おりゐたまひぬる冷泉院の御嗣おはしまさぬを飽かず御心の中に思す。同じ筋なれど、思ひ悩ましき御事なうて過ぐしたまへるばかりに、罪は隠れて、末の世まではえ伝ふまじかりける御宿世、
口惜しくさうさうしく (若菜下④一六五―六頁)

これは女御腹の若宮が立坊した時点だが、光源氏は冷泉院の嗣が絶えたことを密かに悲しんでいた。光源氏が何かを伝えたかった相手は女御ではなく別にいるのである。光源氏は女御に対しては、邸宅などの公的な側面が強いもの、「家」に関わるような形あるものを中心に伝えるのであり、伝授しなければ伝えられない琴の琴のよくな形のない大切なもの、私的な側面の強いものは伝えなかつたのである。

明石の筋は邸宅や財産という「家」に関わるもの、形あるものは伝領せず、夢や願、楽といった私的な形のなものを中心に受け継ぐのに対し、光源氏から女御への伝えは、邸宅等の形あるもの中心になるなど、彼らの在り方は非常に対照的なのである。

入道、尼君、明石の君、姫君は明石という「筋」であった。この「筋」は個でも集団でもなくつながりであり、「筋」から物語を捉え直すことにより浮かび上がる登場人物の感情や在り方があった。また、明石の筋は、結果として

その存在を認められることになったとしても、その本質は強い勢力を誇るものではなくつながりであり、密かに影響を及ぼすものである。この明石の「筋」の物語は、個とは違う、また集団とも違うものとして『源氏物語』を貫き支えるものとなるのである。

* 『源氏物語』の本文は新編日本古典文学全集から引用し、表記は私的に改めた。諸本間の異同は「大島本源氏物語」「源氏物語大成」「河内本源氏物語校異集成」「源氏物語別本集成」に拠り、異同により問題の生じる箇所は注にて適宜考察した。『うつほ物語』『紫式部日記』の本文は新編日本古典文学全集に、『小右記』の本文は大日本古記録に拠る。

注

- (1) 『源氏物語研究序説下』(一九五九年、東京大学出版会)。
- (2) 『源氏物語の研究 改訂版』(一九八一年、未来社)。
- (3) 『源氏物語講座 第四卷』(一九七一年、有精堂)。
- (4) 近年の「明石一族」関係の研究については、明石巻を中心に研究史をまとめた袴田光康氏の「明石物語の人々」とその原点―「明石」巻の諸問題と研究史的展望―(『源氏物語の鑑賞と基礎知識』11、二〇〇〇年、至文)

堂)や、明石の君論を中心にまとめた竹内正彦氏の「研究史―明石の君論の現在」(『人物で読む源氏物語12

明石の君』二〇〇六年、勉誠出版)が詳しい。

(5) 以下、煩雑さを避けるため、明石入道は入道、明石尼君は尼君、明石姫君(女御、中宮)は姫君(女御、中宮)と適宜略す。

(6) 「家」に関しては歴史学の分野で、婚姻形態や所有・経営から家父長制家族の未成立について論じた関口裕子氏の研究がある。また、服藤早苗氏は『家成立史の研究』(一九九一年、校倉書房)等において、共食・共住する具体的家族形態が母系直系家族であつても経済単位ではないことを明らかにした。つまり、外祖父母と孫が共に暮らしていてもそれは「家」ではなく、孫は父の政治的立場、経営に連なる。故に、姫君が入道や尼君と明石の地において共に暮らしても、それは「家」ではない。そこに集団・共同体意識を見出すとしても、それは「家」以外の何かである。

(7) 「明石一族」を、入道と桐壺更衣の血縁関係から桐壺更衣の「一族」と関連させる阿部好臣氏の「明石物語の位置―桐壺との関わりにおいて―」(『語文』41、一九七六年七月)や、佐貫新造氏の「桐壺更衣と明石一族」(『帝塚山学院短期大学研究年報』43、一九九五

年一二月)などの論があり、「明石一族」と桐壺更衣の「一族」を合わせて一つの大きな「一族」として捉える説もある。たしかに、「明石一族」と光源氏には遠くはあるが血縁があり、入道が「故母御息所は、おのがをぢにものしたまひし按察大納言の御むすめなり」(須磨②二一頁)と発言している。しかし、この発言は光源氏との縁組に反対する尼君への反論として述べられたものであり、入道がこの場面以外で桐壺更衣や光源氏との血縁を口に出すことも意識することもない。光源氏はもちろん、桐壺更衣やその両親について描かれた場面においても明石の筋と血縁があることを意識した記述はない。また、たとえ入道が光源氏にも影響を及ぼす過去に存在したかもしれない大きな「一族」を志向したのだとしても、光源氏がそこに帰属する意識を持つことはない。それは、若菜下巻において、明石の君が入道からの手紙と願文を見せたのに対し、光源氏は女御にのみ自らの願文を別の機会に見せることを告げ、明石の人々と願を共有しようとしなかったことから確かめられる。現在までの境遇に入道の影響があったことは認めても、光源氏には別の願や宿世に関する考えがある。影響関係、協力関係にあることと「一族」という集団として在ることは区別されるのである。

また、このかつて存在した勢力や血縁関係が物語展開にどれだけ有効に作用したのかについても疑問が残ることから、本論では明石の筋を桐壺更衣の「一族」と重ね合わせて考えることはしない。

(8) 大島本の表記は「ひとそう」、「そう」であるが、語の解釈を明確にするために本論では表記を「一族」、「族」として統一する。同じく「すち」も「筋」とする。

(9) この場面の「一族」は御物本(東山御文庫蔵)に「ひとつすち」という異同があるが、本論では大島本に従い「一族(ひとそう)」として論じる。異同が生じた理由としては、当該場面における右大臣と周辺の人々を通史的に「筋」と把握するか、共時的に「族」と把握したかに拠る違いと考えられる。

(10) 当該例は紫の上が藤壺に似ている理由を光源氏が想像したものであり、類例に「親王の御筋にて、かの人にも通ひきこえたるにや」(若紫①二二三頁)がある。二人の相似の理由を血縁関係にあると捉えることに変わりはないが、当該例は兵部卿宮と藤壺が同腹の兄妹であることに重点を置いて捉え、この例は紫の上が兵部卿宮の血筋だからと親子関係に重点を置いて捉えたのである。この二例は表す内容はほぼ同じであるが、視点や切り口の違いにより用いる言葉や表現が異なっ

ている。

(11) 「族」には他に「右の大殿、致仕の大殿の族」(竹河⑤九六頁)という夕霧や頭中將の「族」などがある。

(12) 「一族」「族」には作品毎の定義の差、語彙の差があり、全体としての定義は難しい。例えば、『紫式部日記』には若宮の親王宣下の祝いに關して「氏の上達部ひきつれて拝したてまつりたまふ。藤原ながら門分かれたるは、列にも立ちたまはざりけり。」(一五九頁)という一文がある。氏の中で「門」の違う人は参上しなかった、つまり「一門」の上達部のみが参上したことが語られている。同様の記事が『小右記』にもあるが、当該場面における上達部を『小右記』では「一族公卿侍臣」と表現している。同じ人物達を指すが、「一門」「一族」とそれぞれの作品で違う言葉を用いて表現しているのである。どちらも「氏」の下部組織を表すものとして使われた点では共通するが、作品毎に語義が異なることも明らかであり、それぞれの作品における語義を重視する必要がある。そして、『源氏物語』における「族」は、主体となる人物が男性であることからわかるように、男性中心、あるいは父系中心と言える。つまり、「一族」として集団を捉える場合には、男性・父系中心の観点になり、女性・母系の側つながりや関係性は

看過してしまう可能性がある。

- (13) 俊蔭一族が本文中で「家」と称されるのは楼の上だけであり、これは楼の上における使用語彙の問題になる。琴の伝授も学の伝授も、俊蔭が清原氏、仲忠が藤原氏である限り二人の「家」は異なっており、「琴の家」「学の家」の継承ではあり得ない。仲忠は俊蔭の「家」の人間ではないから、俊蔭の「家」に伝来する文書を手にする為には、仲忠以外に継ぐ者がいないことを宣言し先祖の霊の許可を求めなければならなかったのである。

- (14) 小林宜子氏が『源氏物語』の音楽描写―人の世に渦巻く音と情―(『比較文学研究』58、一九九〇年一月)において、俊蔭一族が奇瑞を起こす天上からの楽を相伝するのに対し、延喜の帝を始祖とする「明石一族」の音楽が「あくまで(宮廷)を中心に動いている」とが重要な相違であると述べるように、「明石一族」と俊蔭一族では伝承の祖や目的、在り方、奇瑞の有無など相違点も多い。

- (15) 本論文では『源氏物語』における「筋」の中で「一統きの関係で連なっているもの」という意味の「筋」、現在の言葉に置き換えれば血筋、性質、流儀、芸風などを表すものについて論じる。また、「筋」について詳し

くは拙稿「『源氏物語』の家と筋―頭中将家と柏木―」(『名古屋大学国語国文学』95、二〇〇四年二月)で論じた。「筋」は父方母方の双方に使用できる言葉であり、どちらでも有り得る。男性・父系中心である「族」とはその点が違う。女性の側のつながりを見逃さないためにも「筋」を考えることは必要である。この若菜上巻の場面で「女子の方」に続くこととされていることから、女性の側も表すことができる「筋」として考えることが必要となる。

- (16) 入道には、夢を見た頃から尼君が明石の君を孕んでいたことや「俗の方の書を見はべしにも、また内教の心を尋ねる中にも、夢を信すべきこと多くはべし」(若菜上④一一四頁)という夢を信じるだけの根拠があった。

- (17) これは、入道が「延喜の御手より弾き伝へたること三代になんなりはべりぬる」(明石②二四二頁)と延喜の帝からの手を伝えていること、又明石の君が「自然にかの前大王の御手に通ひてはべれ」(明石②二四二頁)とそれを受け継ぐことが語られたものである。楽に關しては他に琵琶の「筋」もあり、匂宮が琴の琴ではなく琵琶を得意とすることに明石の筋からの影響が想定される。

- (18) この場面に關しては明石の君の喩えが冬から夏の景物

へ、女御の藤の花の喩が春から初夏へと変化したと河添房江氏が「源氏・寝覚の花の喩」（『源氏物語の喩と王権』一九九二年、有精堂）において指摘している。

(19) 明石の筋は紫の上も対照化するが、紫の上については別稿で論じる。

(20) 光源氏は女御に対しては「よろづのことに通はしなだらめて、かどかどしきゆゑもつけじ、たどたどしくおほめくこともあらじ」（常夏③二三九頁）と中庸を尊ぶ教育方針であり、何か特化したものを身に付けさせようとは考えていない。

(21) この「同じ筋」は、冷泉院も東宮も自分の血管であるという点では同じだということを表している。光源氏からは女御の子どもである東宮は「筋」として把握されるのである。

（よしむら・ゆうこ／名古屋大学大学院博士課程後期）